森枳園傳

單

H 20
384

森枳園傳

東京帝國大學圖書印

B 23475

鷗外藏書

森立之、字ハ立夫、通稱ハ初伊織、後養竹と改め、維新後ハ單に立之と称す。号ハ枳園。(文化四年丁卯―明治十八年乙酉。享年七十九)。此の人、七八歳まで常に母の乳を飲で育つた。それ故、終身人乳の味を嗜で忘れ能はなんだ。澁江の家にて乳母を傭ふ毎に、呼らす養竹は其の試験を託した。スルト養竹ハ『文旨い物ハ無銭で飲める』あまい滑稽半分に雀躍して来り、腹存分に飲むので毎度抽斎の爲めに誡められたといふ。養竹十一歳の時、弘前藩醫小野道秀(道瑛の倅なり。時に年六

十一）と共に瀧江抽齋（時に十三歳）に就て教を受く。是れハ文化十四年丁丑の事であつた。後福山の儒醫伊澤蘭軒に学ぶ。當時蘭軒の門下に二奇人あり。一ハ養竹にして、又一ハ鹽田陽庵である。養竹ハ聞かに隠れた俳優の真似をして居り、陽庵ハフイツと外出して中々帰り来らず、『何をしに出掛けて行くのか』と、同窓の者が追跡して竊に窺へバ、なめらも知らぬ陽庵ハいつも指の腹へ竹杖を建てゝ遊びながら本郷追分の市街を歩いて居たといふ。

（陽庵の事ハ、別に委しく記すべけれど今ハ略す。）

此の時、二人共に十七歳であつた。尓来養竹は頻りに芝居の真似がして見たさに、或る時ハ舞臺に出て「ツケ」を撃ち、或る時ハ相中の仲間へ這入つて大名の一人に扮し、又或る時ハ『ツ申上[illegible]まし』の役を勤めたこともあつた。此の事ハいつか目附役より言立てられて君侯の耳に入り、遂に『永の御暇』となつた。

（此の事の精密なる年月ハ、彼の『壽藏碑』に拠る

の外なかるべし。去れど壽藏碑は何れへ仕舞なくせしか見當らず。要するに、青年の時の出來事には非らざらんか。

（第一）小生の伯母（母の姉）は、少時阿部侯（伊豫守正倫）の小姓となり、藩中の出來事を能く聞込んで居り、枳園をも能く知て居りしかど、枳園の永の暇を取りしたる事は毫も知らなんだと。伯母は天保四五年即ち枳園が二十七八歳の頃迄は阿部侯の小姓なり、

（第二）小生の母が父と結婚したるは、弘化元年甲辰、即ち父が四十歳、枳園が三十八歳の時なれど、其の後、一兩年間は枳園猶大磯に居りしるが如し。

（第三）枳園が狩谷棭齋に就て學び、且つ本草を研究して所謂『先生株』と爲りたるは、永の暇（以前）までありたるに似たり。

枳園既に永の暇となりて後、暫らく江戸に居たれども、負債積で山を爲し、遂に（大磯を指して）逃亡（夜逃）[redacted]したり。大磯の名主某、枳園の門人となりしに依り、枳園は其の人を便りて行きたるなり。

此の事は書面に載することを憚る

(元来生の父は、能く遊も枳園を保護すべき心得ありし由なれども、甚好ましからぬこと二科条ありて、多紀に對し、曲直瀬に對して、父が意外の大金を辨償し、纔に事落着することを得たり。それも亦逃亡等は之を傍観しゐるなり。)

枳園、家族(妻かつ。男児養真。天保六年乙未生。并に老母)を携へて江戸を出発する時、嚢中纔に八百二三十文ありしのみ。足弱連れを伴ひて如何ともすることを能はず、湯本の旅店に宿泊するに及ひて全く無一物と為り、已を得ずして臨時の按摩と為り、上下十六文宛の銭を得て、辛くも大磯に往くことが出来た。

十行 廿字 東京相馬屋製

既に大磯に往き、醫業を開きて後は相應に流行して意外に収入も多く、且つ穀物野菜などの到来物も多かつたから、財嚢も先づ甚しき空乏を憂へなんだ。

生の母が弘化元年甲辰十一月六日に瀧江へ嫁してより、約二三年間は、枳園は猶大磯に居て、折々江戸に出で、出る毎に、一週間位づつ、瀧江の家に逗留して居られたらしかつた。母の話に、

「養竹さんが大磯に居た頃、少し懐が暖かになると、メカシ込で、江戸へ遊びに出て来た。御召縮緬のきものを着て、海老鞘の脇指を指して、一寸褄を取つて、刺身絞りの襌を出し掛けて、ひとりで意氣がつて居ると、何処迄も七代目張りで何のこと。「イヨ成田屋ア」と声を掛けると、一寸立つて力んで、妙な声を出した。

といつた。勿論御召縮緬といつたところで、當時は一反纔か二分か一朱か、二分二朱で何のことはないだらう、其の頃の松園でも、マサカそれを着る位の事は出来たであらう。

（磊落な松園は、母が藤堂家の中老たりし頃から召仕つて、且つ遊江へ嫁する際に連れて来たおりくといふ婢に戯れ、逃げ廻はるのを、追ッ掛け、追ひ廻はして、到頭大きな行燈を顛覆し、座敷中を油だらけにしたので、母が諧謔半分に絶交の詩を送つた。尤も直き媾和をした。ろくは松園と豊芥子との挑みに堪えず、父の世話で他家へ嫁した。）

其の頃、枳園に就ては今一つ困まつた事があつた。當時生の長兄恒善は年紀二十歳前後、弟の優善が放蕩で困まり抜いてゐるのに引換へて「甚おとなし過ぎる青年」であつた。枳園は來泊する度毎に「餘り因循だと勞症が出る。すこし二朱出せば、小意氣な新造が買へるよ」といつて、屢々吉原へ誘はんとした。父は元來妓樓に足を投ずるのを罪惡の一つに數へて居る人であつた。が枳園は恒善同行の義を、窃に母に請るので、母は非常に困まり、往々議論を戰はせたさうであつた。

併し當時枳園が江戸へ遊びに來たのいふのは只遊びに來たのではなく、歸參の周旋に來たのであらう。

既にして枳園は江戸に歸つた。母の話に拠るに「お父さんは、其の頃養竹さんの事に就て、福山藩の服部九十郎さん(公用人)を始め、小此木(おこのぎ)さん(各は伴七、勘定奉行)、太田さん、寺川さん(二人共に勘定奉行)、伊澤兄弟(長安、盤安)それから小島先生(成齋あり)、父とは兄弟のやうに親しい、など

十行 廿字 東京相馬屋製

一種に斡旋を頼んだけれど、肝腎の殿様（伊勢守正弘）が睨んでお出になるので意の如くは行かなんだ。で先づ多紀樂眞院さんの心を和らげて、醫学館の何かに使つて貰ひ、それを規模に帰参を迫るより外、仕方がないといはれた。」

とぞ。

松園の江戸に帰つたのは、弘化三四年の事であらう（是れも翁の自傳壽碑に照らせば直く判然すべし）。此の時、瀧江の家は神田お玉ヶ池に在り、松園をば近所に世帯を持たせて、家賃は勿論、日用品を悉く瀧江から贈つた。それでも猶細君が殆んど毎日、何か請求に来り、果てには上等下等の衣類迄も供給した。此の話に、

『勝兵衛（松園の細君、以名はおりつ）は丸で素ッ裸でやつて来たが、實家から沢山持つて来たのを知つて居るものだから、未だ此の時分は、大分おとなしかつたのを知らないで、頭の天辺から足の爪先まで、悉く請求する、襦袢ばかりでも白縮緬のを五六本もやつた』

十行 廿字 東京相馬屋製

その事である。

父の尽力で、ヤット多紀の心を和らげる事が出來、嘉永元年戊申十月十六日、枳園に醫学館の醫書彫刻取扱手傳を命せられた。當時の口達は左の如し。

阿部伊勢守醫師　伊澤磐安

黒田豊前守醫師　堀川舟庵

多紀樂眞院門人　森養竹

右大岡主膳正殿ニ差圖之旨ニて、館主多紀安良老中渡、世話役小島春庵老列座、世話役手傳勝本理庵老、熊谷辨庵老侍座。

此の時、辛くも多紀（樂眞院）の心の緩和した効驗が顕はれたのである。枳園は勿論浪人も名は樂眞院門人の名義を假りたのであらぶか。是れは父が醫学館の講師となつてより五年目、将軍家拜謁の前年である。此の時、枳園四十二歳。此の日同時に彫刻取扱手傳を命ぜられし人々の中に、伊澤磐安は其の後、嘉永五年壬子十二月十六日に、講師を命ぜられ、堀川舟庵は同六年癸丑二月二十六日に亦講師を命ぜられたと

十行　廿字　東京相馬屋製

も、獨り枳園ハ安政元年甲寅正月二十五日ニ至りて始めて講師を命せられた。尤も是れより先き、既ニ帰参ハ叶ひてゐるものと見え、此の時の名義ハ左の如くであつた。

阿部伊勢守醫師　森　養竹

是れハ枳園が四十八歳の時である。

枳園ハ此の時、金匱の講義を擔當した。併し元来本草学者であつて、以後常ニ本草の講義を受持つてやうであつた。

保云く。私ハ文久二年壬戌、即ち十六歳の春から一六、二七の午前ニ醫学館へ出て講義を聽聞し、明治元年、十二歳の三月まで缺席なしニ聽いた。初め一六は、父（弘化元年甲辰三月、講師となる）。井岡友仙（同二年乙巳十二月同斷）。稲葉文定後ニ文碩（同四年丁未四月同斷）の三人が講師であり、二七は、伊沢磐安（嘉永五年壬子十二月同斷）。森養竹（安政元年甲寅正月同斷）。山田昌栄（同　年　月同斷）の三人が講師であつた。併し私が知つてからハ、父ハ既ニ歿して、佐藤元萇が其の後を襲ぎ、幾もなく伊沢磐安ハ幕府へ

私は稲葉文貞の素問を聽いて、素問は自ら父の受持であつたから、父の遺言まで、素問は多紀安琢、後に養春院法印、楽真院法印の子より

召出されて橋宗俊が其の後を襲いだ。そして井岡とは常に本草を擔任して、井岡は本草綱目を講じ、森は神農本草經を講じた。私は此の人々の中で、最も山田椿庭の講義振りに感心して居た。彼れは或る時は金匱を講じ又或る時は扁倉傳を講じれたが、當時の私のやうな幼稚者には最も解し易かつた。

「森枳園は終に將軍家謁見の運びに至らなんだ。是れは理由があつたのであらう」

に委しく教へて置いたから、成善が成長したら安琢に学ばせよと言つたのであつた。それで父の死後、成善は養春院へ入門した

廿行廿字 東京相馬屋製

枳園は色の白い、目の大きい、鼻のスーツとした中々の美男子であつた。そして七代目を氣取つて居たさうだ。惜しい事には小男で、鰭のあたりが見すぼらしい人で、貧乏をするのが癖であつた。私が知つてからの後、維新の少し前頃に、伜の養眞と父子揃つて古本屋巡りを為し、其の序に宅へ来た。當時枳園は六十歳前後、養眞は三十歳前後であつたが、父子恰かも学友の如く、宅に居れば机を相對して研究を為し、議論を為し、又相連れ立つて珍本の掘り出し等に歩いた。養眞は、枳

園と違つて、大柄の人ではあつたけれど、色黒く、品悪るく、殊に其の目障り、耳障りなのは非常に氣ぜはしないやうな態度をするのであつた。体をもぢ〳〵させながら『エヘ左様さ〳〵』と捷言にいひつゞけるので、何だか促り立てられるやうな感がして落附くことが出来なかつた。私の母などは、『アレデ能く勉強が出来る』といつて評つた位のものであつた。

後年、桜園の話に、養真は維新の際（時に二十四歳）福山へ引移つて後、傍ら洋書（後に英書ならん）を研究して藩の教授となつたが、不幸にして、間もなく福山で死んだ。

桜園は曾て演劇に趣味を持つて居たのみならず、俳優の声色を遣ひ、其の身振りに模擬することも頗る妙であつたといふ。私の見た桜園は六十以上の老人で、餘りそんな事は遣らなんだけれど、母の話に拠れば、『養竹さんの百種類（ひやくいろごは）』といふのは友人間に有名であつたといふ。それは手拭を以て坊主頭を覆ひ、それから声色と身振りとに取掛かるのであるが、例へば大太夫（岩井杜若）に扮

すればこそ何処もかも大太夫らしくあり、源之助（後）は宗十郎、又長十郎、又助高屋高助。有名なる田之助は其の兄助高屋高助（の父）の当塲に扮すれば、あのつらつきが其の佐々木源之助らしくなつてゐた。私は（後年）此の人に就て、度々王子、又は鼠山の辺へ採薬に往つたが、道灌山辺の掛茶屋で高処から低処を瞰下ろす処があると、松園は『春のながめだなあ』と、七代目（勿論私は七代目を見てゐない）の五右衛門に扮し、『何が何だ』あとしりきんで見せた。或る時、王子権現の手水鉢の中に雌雄

二匹の蠑螈が居るのを、森の塾生が其の一匹を捕へて之を殺した。松園はそれを見て、微笑してから、『今に幽霊が出るぞ』といつた。偶然にも一天俄に曇りて雷が鳴り始めた。松園は『そら出たすつくとつくつくだ』と、驚て雨宿りの徒然を慰めんとして、七代目の民谷伊右衛門、尾上梅寿のお岩と小仏小平との早替りで、彼の戸板返しの場を演じて見せて呉れた。私が『森さん、ソンナ旧い役者ばかりまねて見せずに、今の俳優の真似をして見せて下さい』といふと、松園は首を掉つて、

十行 廿字 東京相馬屋製

『今の役者は駄目だ。ナニ小團次が、小團次は最も惡るい。阿爺さんは西洋といつてお嫌ひなすつたぜ。今の役者で可いのは、訥升(後に助高屋高助)ばかりだ。訥升の判官は可い。訥升を除けて、未だし紫若(後に岩井半四郎)が可い。跡の役者は見るに堪えん』

など言つた。私が紫若をば『笑ひ政岡』といつて揶揄ふと、先生眞面目になつて、

『其の政岡の泣く所の出来ない所に無量の味があるでは無いか。田之助や坂彦の政岡を見なさい。アレが眞個の乞児芝居といふものだ』

などと答へた。

探薬の歸途、いつも巣鴨附近(私は十歳位の時のことゆゑ、確と場所は分らなんだ。)の『五大力』といふ蜘蛛網だらけの蕎麦店へ這入つて、もりそばか、又はかけそばを二箇づゝ取つた。其の蕎麦の器が不潔で、非常に醎かつたものゆゑ、私共は供に連れた若徒に遣つて仕舞つたれど、枳園は『此の蕎麦が妙だ』として舌打鳴らし、酒をば猪口に三杯許飲んだ。今思へば、眞の生蕎麦であつたのであら

十行 廿字 東京相馬屋製

ふ。

母の話は、

『養竹さんは極小食で、飯は猪口に二杯位より食べず、酒もヤット猪口に二杯位、肴もそれに準じた。其の代はりに、日に何度でも食べる。漬物は大嫌ひで、「如何な美人でも漬物を食べる所を見ると愛想が尽きる」といつて。鼠米が大好きで、熬つて、ポチ〳〵食べる、丸で鼠のやうである』

といつた。併し明治十五六年の頃、私の宅で馳走をした時、漬物(多分瓜の奈良漬)が出て居たのに、じつと凝然視て居た後、サモ氣味悪るさうに、箸で挾んでコリ〳〵食べた。

酒も晩年には大酒になつて、猿のやうな真赤な顔をして、湯呑で[illegible]して大氣焔を吐くのが常であつた。但し是れは七十五六歳以後の事であつたと思はる。

島田篁村(重礼)翁の話は、(此の話は枳園が七十六七歳の時の事なり。)旧福山藩主阿部伯(正桓)は、自分の門人である。一日、其の誕辰の祝ひは

招かれて本所横網の邸へ往くと、最前から枳園が来て居て、大氣焔を吐き、動もすれば正植を叱咤する其の状は、毫も昔の君臣らしい所がなかつたとぞ。

枳園の家の玄關には、『葛根湯一服何錢、霍香正氣散一服何錢、不換金正氣散一服何錢』といふ如しき、ズラリ藥價の表が張（貼）出して有つた。何時の頃より此の法を用ゐ始めたか知らねども、想ふに大磯以來の事か、慶應義塾の始めて月謝を取つたのと好一對である。

前にも述べた如く、枳園は老後といへども中々元氣であつた。況して壯時は非常なもので有つた。『抽齋の事ども』の中にも申上ぐる如く、池田瑞長が京水翁生前の慣習に從て每年正月發會式を行つた。一年何と思つたか其の席へ藝妓を聘し、枳園に底拔騷ぎをもした。其處へ抽齋が遅れ馳せに来て頗る異議を唱へた。伊沢磐（磐安の子）、并に池田銓吉（瑞長の弟子で、叔父全安の養子となる。）が私に語す所に據るに、

『阿爺さんのは立腹なすつたに、従来一度も見

おとがふらつてが、此の時ばかりは大声叱咤して
いふ有様で、『どんなことをするかと思へば、発会式は
今日限りで止めてがよい。』『立夫、足下は何の眞
似だよ』といはれたので、一同恐縮したと
いふ。母の話に、
『お父さんの暴い辞をお発しなさつたのは聞
いたことがない、怖い顔をなさつたのも見たこと
がない』
として見れば、此の時は餘程腹を立つたものと
見える。

それとは異つて、枳園が中ッ腹を言ひ出したこと
がある。是れも彼の磐さんと、私の兄矢島優善と
の話だが、金座の津藤といふものは、非常な金盛
家で、詩人、文人、醫師、力士、俳優、并に諸藝人、多く其
の門に出入した。一日、是れ等の人々を自宅へ招
いて大宴会を開いた。（矢島は道楽者で、平素津藤
と懇意であつた。）磐さんは大人の代理に往か
れたのであらうと思ふところが満座の中で、枳園が小
野道秀に對して怒り出し、『ベランメー』口調の、中
ッ腹主義でドヤし付け、流石の俳優も落語家も、

手の附けやうがなかつたとぞ。

小野道秀（文化四年丁卯ー明治九年丙子。七十）は瀧江の親類頭と称して居た人である。其の理由は瀧江本皓は、稲垣清蔵の子専之助（允成）を嗣子として、妾腹の子令蔵をして小野家を相續せしめた故である。令蔵（天明三年癸卯ー文久二年壬戌。八十）通称道瑛。津軽家の近習醫より、道秀（名は富穀）は其の子として亦近習醫より。道瑛父子頗る蓄財に長じ、江戸定府中、第一の富者を以て目せられた。左れど道秀は性愚にして吝嗇。枳園と同年にして、十一歳の時、同日に抽齋の門人となりたるの縁故をもつて、常に交際しては居りたれども、意氣相投合せず。

（抽齋も道秀を引立てゝ、遣らねば叔父さん（道瑛を指す）に濟まぬが、アノ愚で盡いのには困りきると称し居らるゝ由。杵屋勝久の話に拠れば、父は道秀を呼ぶに「包荃」の名をもつてし、「包荃、何々をしろ」などいつたことのあつてゐる。是れは道秀が名の通り包荃であつたからのことである。推して其の人物の如何を

十行 廿字 東京相馬屋製

知るべし。

枳園平生道秀に快からぬ由なく、此の時其の不平の氣が一時に發したのであらう。

枳園の私交に就ては面白からぬ事が頗る多かつた。而して父には一と方ならぬ迷惑を掛けた。けれども父は常「アレは、あゝいふ人だ。而して悪るい事ばかりもない、又善い事もあるのだ」といつて毫も怒る事もなく、幾回となく尻拭ひをしてやつたとの事である。

以上は皆私が又聞きに聞いたそのみ由來て

かこそ學のやうで、取留めたこともなく、甚申譯なし。

私の見た所から言へば、維新前には、私は極めて幼稚であつて由來園より其の人物如何を知るべきやうもなかつた。只

『森さん、あなたは駈落（其の頃、私にはかけ落ちは何の事であるかを知らず、單は悪るい事と推量して居つたのだ）をしたさうですね』

と言へば

『うむ、駈落をしてよ。駈落ドンく、面白かつたぜ』

十行 廿字 東京相島屋製

あつて答へた位のものであつた。
明治五年私が藩邸を逐はれ、前年廢藩の為めに、藩邸は取掃ひになつた。横網の或る裏店に居て、此の事は例の『既往の夢』の中に書いてある。其処から大學南校と海保先生の塾とに通學して居ると、一日、突然松園が尋ねて來た。聞けば『一昨日福山から着京したばかりだ』とのことであつた。『湯島の切通しに居るから是非來い』と云つた。二三日往かずに居ると、先生また來た。それで『なぜ來ぬ』と詰つた。で尋ねて見ると、商店風の家で、居と次の間と臺所より外なかつた。而して松園

十行 廿字 東京相馬屋製

は店の上がり鼻へ机を出して讀書をして居た。其の有様は丸で代書者（今日で言へば、區役所前附近の代書人）のやうであつた。私が『代書者のやうですね』といふと、松園は呵々大笑するのみであつた。其の頃月に何回となく横網の下宿へ尋ね來り、不在の節は淺草紙へ漢文で書いた置手紙をして行き、又私の方から訪問すれば、概ね山下の雁鍋か、駒形の川升（今倶に亡ぶ）のやうな一寸した飲食店へ同行して一杯を酌みながら、時世を痛論し、當時の政府を攻撃し、且つ

『鹽田良三でさへ工部之權大丞（後に太政官大書記官となる）に為つて
居るのですもの、実に気兒芝居れ』
なぞと言つた。
（鹽田良三。今鹽田眞といふ。鹽田陽庵の子なり。
此の人が道樂者でありし時の事は『既往の夢』
大名の生活の部に一寸載す。猶伊沢の事蹟が
鹽田陽庵の事蹟の内に委しく（一寸上に）
幾もなくして枳園は文部省十等出仕を拜命し
た。當時文部省の九等十等出仕（又は相當本官）に
は枳園の知人が多かつた。私の知つて居る丈け

にても、榊原芳野は曾て父の講義を聽聞に來り
し人なり（世の話に拠る）。前田元温は多紀茝庭の
塾に居た人なり、岡本保孝（當時九十歳許　枳園の話に拠
る）は其の中最も大家にて、狩谷棭齋の友人なり。
堂々たる学者が四五十圓の月給をくびられて
居たのである。それでも枳園は小生を捉らへて
議論を仕掛ける、其の議論が毫も先生らしくな
く、丸で友人間の議論のやうであつた。彼れは盛
に洋学を攻撃し、且つ多紀の『漢蘭酒話』を楯甲と
して、洋醫を攻撃した。併し當時の議論は今之を

十行　廿字　東京相馬屋製

者く)
私ハ其の頃、非常に困窮した。まだ藩のあつた頃
に、知事公(即ち殿様)の費用で、藩地から五人扶
持づゝ運送して呉れた。書信も知事公の費用で
往復が出来た。ところが悉皆簡絶の姿となつた。
縁し國から母に出て来た所で兄一人、姉一人、今共
にこれは食はせて行かねばならぬ。今日と違つて、
母の従事すべき職業がなかつた。此の事に『既往の夢』の中に在
り。此処は無用ゆゑ、委しくは述べず。私ハ到底大学の課程を踏んで
行くことは出来ぬと断念した。時に文部省は始め

十行 廿字 東京相馬屋製

て師範学校を設け、上等生には学資金十圓を給し、
下等生には八圓を給して修業させるといふので
あつた。私は思つた『餘り望ましくはないが、先づ
此校に入り、卒業の上、月給を積で、それから真の
修業に着手せん』と。只困まつた事には、生徒は二
十歳以上とあつた。私は十六歳であつた。
(勿論私は二歳の時に八歳と称して君侯に謁
し、公私共に八歳で立て通した。其の割合をもつ
て推せば、此の時二十二歳になるのである。惜
かな、此の前年に藩に請ひて真の年齢に改正

した。
デ取敢えず枳園を訪問して相談した。枳園は最も賛成の意を表し、年齢の所は俺がドウでも話を附けてやるといつた。當時枳園の話のかどくは拠まで、枳園は隨る此の学校の前途に望を属して居らしかつた。
愈よ試験に及第して入学を許された時、枳園は大に悦んで私を例の雁鍋に伴ひ、見るく四五合の酒を飲んだ。そして帰途、車坂の通りで、向ふから十七八の少女が来られば枳園は[illegible]イヨしと言

此の種のるいあへてホンノ僅参考迄に止まらン

ひながら双手を擴げて其の通路を遮り、前に逃るれば右に廻り、左に避ければ左に廻はりなどして大に揶揄した。
私が学校を卒業して濱松縣（後に静岡縣）へ往つて居る不在中に、枳園は文部省を罷めて眞砂新聞の記者と為り、演劇欄を擔任した。併し當時のその名報酬は至て少なかつたであらふ。
（同時に私の兄矢島優（初名優善）も鐘山寮を辞して入社した。それ故に二人から屢ば消息に接した。けれども私は一日も早く書生と為る

十行 廿字 東京相馬屋製

のが熱望で、僅々三十圓の月給の中から二十圓を貯蓄られる際ありしも尚、私の方からは甚疎遠であつた。

それより一二年を經過し、明治十四年に私が愛知縣の学校に關係した暫時前から、枳園は大藏省印刷局の御用掛となつて居た。

當時青年（二十四五）の私は、枳園の爲めに、モドカしく思つて激論をしたことがあつた。併し枳園は、それをなまいきとして咎めもせず、却て益す親密にしくれた。その頃、私の收入は、百三

十行 廿字 東京相馬屋製

十圓であつた。一知半解のわれ〳〵が、しかも学問のみで奉職して此の如しとすれば、さぞひ其の学問は時世に合はぬにせよ、老先生たる枳園は少なくとも二百圓以上の收入はあつて然るべきだと思つた。然るに話を聞いて見ると、准判任で四十圓だといはれた。私は怫然として言つた。『ナゼさんな不安貴をしたのです。どんな事情があるか知らぬが一度褌をふり下げつたものは、再び抹布にはならぬといふではありませんか。ナゼ重々しくたさ

らんのです』。
私は血氣に任せて、今想起しても冷汗の出る
やうな言を吐いた。されども枳園は毫も腹を
立つる樣子もなく、微笑して、
『事情といつては外に何もないが、只貧乏し
たのさ。併し惡るくいふなよ。得能良介とい
ふ奴は、中々わけのわかつた奴だぜ。八十圓
出さうといふから、俺はナアニ其の半分で
よいと折角沢山貰つても又直き免職を食つ
ては何もならないから四十圓でよいといつて其

十行 廿字 東京相馬屋製

の代はりに買殺しにして呉れといつたら、『あゝ
かゝんなら、さうしやう』といつた。君、安心し
て呉れ、俺は生涯捨扶持を貰ふことになつた
やうなものだ』。
私は何分其の話には感服が出来なんだ。併し
其の頃から枳園は頗る工面が好くなつてゐら
しかつた。初め其の京橋区水谷町九番地の家
は猫の額のやうな家であつた。が此の頃から
國内では狩谷棭齋の和名抄箋注が官板とし
て刊行せられ、殊に楊守敬の手を經て支那に

使（徐氏徐氏筆）の手へ諸種の古写本を売渡した。現に私は枳園の為めに筆耕をして居れた人々を知て居る。此の事は学問の為めにも慶すべきだが、枳園の為めにも慶すべきで、枳園は幾もなく増築を為し、盛なる宴会を開いた。前にも述べた通り、当時の枳園は茶碗酒を煽り、真赤な顔をして大氣焔を吐くのであつた。

枳園、維新前は一所謂坊主頭であつた。維新後は髪を伸して茶筅に結つて居たが、非常に毛の濃い人で、古稀を過ぎても猶總々として壮年の如く、只胡麻塩色になつて来て居る。歯はギッシリ揃つて、毫も脱落はないやうであつた。尤も耳は余程遠くなつた様子で、人の話を聞く毎に必らず一方の耳をオツ立てた。しかし耳は遠くなつても、相変らずの元氣で、よく諧謔をいつた。当時私が面会する毎に、

『君はナゼ細君を貰はぬ』

と尋ねる。

『イエ、私は十四五年も經つてから後でなけれ

だ』
といふと、
『そうか、散らしか。贅も至極よからう』
揶揄するのが常であつた。あまりしかれ或る時、亡姉と外一人とを伴れて外出をした時、私は二人を近所へ待たせて置いて、枳園を訪ふた。僅々五六分間で暇を告げると、驚かれやうな顔をして頻りに引留めた。
『実は同行者を二人近所に待たせてありますから』
といつて、强て帰らうとすると、枳園は玄関まで送つて来り、突然指を一本出して見せて、微笑しながら、
『一合助かつたね』
といつた。是れより先き、私が十二歳の時、弘前へ出発の際、
『国へ行くと、充分に勉強が出来ないのが何より遺憾です』
といつたら、
『ナニサ、其の代はり生鱈が食へるから可いていふいら』

十行 廿字 東京相馬屋製

などいひ、
『しかし好い芝居の見られるものは、実に氣の
毒だ』
と附加へた。万事が此の調子であつた。
明治十六年十二月二日、私の兄矢島優が死んで
時、私は其の死屍を引取つて、宅から感應寺へ埋
葬した。其の時、枳園は弔には来たれど、諧謔ばか
り言つて居たので、私の母に
『ドウモ森さんは冷淡でいかん』
といつた。けれども其の翌十七年二月十四日に

私の母の死んだ時、やはり枳園は弔には来たが、
前年の、兄の時とは雲泥の相違で、私に向つて、自
分が往時一と方ならぬ世話になつたこと、屢々議
論を戦はせたことなどを述べ、阿母さんは実に貞
女で、女丈夫であつたと、あらし述べて声を震はせ
た。私は枳園の態度の、此の時程厳粛であつたの
を見た事はなかつた。
枳園は得能の言を信じ、一生買殺されたつもり
で安心して居た。ところが不幸にして得能は死
なれて為めに折角の約束も畫餅に歸し、遂に印

十行 廿字 東京相馬屋製

刷局の雇かれた。
明治十八年十月五日のことであつた。桜園が私に書を寄せ、
少々お話致度有之、何日何時に参上致べくや宜しきや、
と申来つた。当時私は芝區櫻川町十八番地に住し、京濱毎日新聞記者であつて、ことに折悪しく社用で一週日程不在であつた。同月十日に帰宅して見ると、留守宅へ此の郵書が着て居た。で直ぐに郵書を発し、

十行 廿字 東京相馬屋製

明朝此方より伺ふ可申上べく旨通じ置き翌朝（十一日朝）約束の如く訪問した。
スルト、
『実は遊んで居て困まるから、社の方へ話して、演劇欄を受持たせて呉れよ』
と依頼であつた。無論私は斡旋のことを承諾した。そして即日直に其の趣きを社へ通じ、見本として二三の文章を交付した。しかし折悪しく翌々十三日に社用で遠州へ行かねばならなかつた。勿論遅くも一週日目には帰京の豫定であつた。で桜園に

向つて其の事を告げ、且つ「私が帰京次第、此度吉報をお耳に入れませう」と受合つた。ところが遠州へ行くや否や、濱松から大居へ廻はることになつて意外に日子を費したので帰途を急いで為めに掛塚から豊川丸といふ汽船に乗込むと、今度は暴風雨中に汽罐を損じ、それやこれやで拠なく暫らく下田港に逗留し、やつと帰京したのは十二月十六日であつた。スルト留守宅へ、枳園が六日に没したといふ通知が来て居た。私は此の状を見て直ちに愕然とせざるを得なんだ。

嗚呼、父の友人、多くは私の知らぬ以前に没し、生存して居たのは、海保、小島の両先生と、伊沢、岡本、山田と枳園との数者に過ぎなんだ。海保小島は私の先生で何れもだが其の他の人々の中で伊沢は既に私の七歳の時文久三年癸亥に没し、山田は温厚篤実の君子だけに何分氣が詰まつて寄り附かれず、岡本は九十の老人で對手にならず、只近づき易かつたのは、枳園と栗本鋤雲とのみ、就中枳園は、或る点から言へば、全く友人

のやうでなのつと。

枳園ハ最も本草ニ精しく、著はす所『神農本草經校本』『本草經纂(？)和名攷』『遊相醫話』等なり。晩年文『いろは字源考』『文章軌範講義(？)』等を著す。左れど私の一讀しことハ『いろは字源考』と彼の『經籍訪古志』とのみ。『遊相醫話』ハ豫て一讀を望ミ居れども未だ其の機を得ず。

枳園ハ又迷庵ニも学びたるものゝ如し。明治十何年の頃、迷庵著はす所の『史詩雑詠』(或ハ『讀史雑詠』ニ名ハ忘れたり)を公ます。此れハ南北朝

の諸将足利、楠等を詠じ、頗る迷庵の勤王心を発揮せるものなり。枳園巻末ニ一寸迷庵の人物を略叙し、一日、迷庵、学友(此の学友の中ニ抽斎もあり、枳園もありしと覚ゆ)と相會談す。偶ミ窓下ニ楊花来りて絃歌す。迷庵起て窓戸を開き、大喝して曰く。咄、汝何ぞ君子の清遊を妨ぐるや云々。

此の文ニ拠れバ、無論枳園ハ迷庵門下の一人であつたのである。

維新の頃(慶應二三年の頃)枳園が紙鉄砲を時

へて嫌疑を受けたとかいふ話を、漏れ聞きまし
れども、（福山藩士上原善八といふ人が私の母
と密話を為し居たり。）子供の聞きまじき事と言
はれんことを恐れて、別に之を問はざりき。爾来
頭脳忙しくして之を問ふの暇なく、遂に今日
に至れり。

枳園の水谷町に居りし時、家族は養貞の未亡人
（大槻氏）と、孫女とのみであつた。今一人の孫女は
向島辺の医師に嫁して居た。

私は其の後無沙汰をするは、甚不本意なりし
かど、私は明治十八年十二月、即ち枳園の没し
た月に、ヤット帰京すると間もなく、急に遠州
へ又行かねばならぬことになつて、其の年内に
出発し、爾来同二十三年まで静岡に居た。二十
三年に帰京すると間もなく博文館出版の著
訳に関係して、繁忙言はん方なく、兎角するうち
同三十年に負傷、三十六年に財政上の負傷を
為してより、いつとなく疎遠になつた。

子婦大槻氏は、かなの会員の一人で漢字廃止説
を執り、又枳園は無論漢字保存論者であるので

十行 廿字 東京相馬屋製

私や、私の兄の矢島などハ、双方から議論を聞い
せられしとまだ何のこと。
枳園ハ死亡の暫時前よみづから不起を知つゝ
のか、多くの知友を會して宴席を開き、抽籤で
二三部づゝの書を与へといふ。是れハ親しく
其の會に列りたる島田重礼翁の話である。私ハ
不幸にして遠州旅行中でありしゆゑ、深く其
の事を知らず。

枳園の裏面に就ては知る所少なければ、或は
ぬか花なるべし。

十行廿字 東京相馬屋製